

いろは文字鉾くさり（その二十八―ぶらぶらしりとり）

江尻 成 泰 

いろはにほへと ちりぬるを

色は匂へど 散りぬるを

わかよたれそ つねならむ

我が世誰ぞ 常ならむ

うみのおくやま けふこえて

有為の奥山 今日越えて

あさきゆめみし ゑひもせず

浅き夢見じ 酔ひもせず

（ん）

色は二色ふたいろ―路傍秋の葉―鼻赤き鬼―仁王にわうのお顔かほ―

仏もつい屁へ―縁へりに赤糸―戸惑をろちひ大蛇―稚児ちごのお参り―

龍虎りゅうこは遇あひぬ―鶴ぬえの鳴よるく夜―瑠璃色あそと青―踊まじる人の輪―

和平と戦火―変はらぬこの世―万代よろづよの歌―大河たいがの流れ―

連山荒磯ありそ―空青き夏―尽やくたぬ厄種あく―根の悪あくコロナ―

汝なは何処いづこから―乱詠らんえい醉夢すいむ―無学ぼんぎょう凡庸―宇宙うちうの周囲しうゐ―

遺跡ゐせき多おほき野―野に宝おお―オミクロンわ涌わく―苦くるの種ま撒まくや―

やれ皆は今―マスク厄除やくよけ―賢者けんじやの系譜―二人ふたりの女子―

古松の雪枝——縁者集ひて——天は冴えあ——熱爛ぞささ——

刺身むらさき——北の露天湯——夢路ゆら夢——名湯恵み——

乱れそめにし——詩歌読む声——遠山夕日——東も西も——

諸諸合はせ——千の詩句の巢——すべてはこれ无

(令和三年十二月十五日)

註

色は二色ふたいろ 秋の鮮やかな紅葉と黄葉。

縁へりに赤糸へり 古事記三輪山伝説から。容姿端麗いくたまよりひめの活玉依姫いくたまよりひめを毎晩訪ねてくる美男子がいた。

姫は孕んだが男の名も素性もわからない。両親は娘に赤土で染めた糸の針をその男の衣の端に刺せと指示。男が訪ねてきた翌朝、糸の行き先は三輪山であり、糸は三巻き残っていた。

戸惑をろちひ大蛇をろち これも古事記から。追放された須佐之男命すさのおのみことが出雲に下り、泣いている老夫婦に出会う。毎年この地の八俣大蛇やまたのおろち(身一つに八頭八尾)に娘を食われ、明日にも最後の一人がやられる・・・と。須佐之男が一計を案じて娘を救ったが、酒好きの大蛇が浴びるほど酒を飲み(飲まされ)、しくじったとは、大蛇もさぞ参っただろう。

(大蛇の体内から出てきたのが草薙くさなぎの大刀たち)

鶺鴒ぬえの鳴く夜よる 鶺鴒ぬえどり鳥はトラツグミの異称。物悲しい声で鳴くそうだ。「鶺鴒ぬえ鳥どりの」は「うらなく、」のどよふ(細々と泣く)「片恋かたこひひ」などの枕詞。万葉集五―八九二貧窮問答

歌に「鶴鳥ねえどりの 呻吟のどよひ居をるに」がある。

連山ありそ荒磯ありそⅡ富山県の風景を頭に。北アルプス立山連峰の山々と富山湾の海。荒磯ありそは岩石の多い磯ありそだが有磯ありそと字を変え、富山県高岡市から西へ氷見市にかけての海を有磯海ありそうみと呼んだ。(今も射水市に有磯ありその町名がある。また北陸自動車道に有磯海ありそうみSAがある。)
家持は越中で弟書持にいむぢの死を伝え聞き、「かからむとかねて知りせば越こしの海の荒磯ありその波も見せましものを」(十七ー三九五九)と悲しんだ。

乱れそめにしⅡみ・・・し。百人一首から二度目の拝借(陸奥みちのくのしのぶもぢずり誰たれゆゑに乱れそめにしわれならなくに)。前後の意味合いは考えない、ぶらぶら歩きだから気が楽。ところで、百人一首のこの句、古今集では「乱れんと思ふ」になっている。

後記

また気紛れ。後記と言ってもコメントは特にない。ご覧のように、少々手のこんだ遊びというだけ。次はいつどんなものが生まれるか、はてさて。

(令和三年十二月十六日)